



健康・児玉さんのこと

田村 明

人間にとって健康ほど基本的な条件にかかわらず日常忘れられているものはない。たまに風邪でもひくと健康のありがたさをしみじみ感ずる。熱が下って、体の中から泉のように健康が回復してくるあの実感は、生命や人生の意味というものを少しは味わったように思う。

私は、戦前肺結核をやって中学生の時一年休学した。戦争も始まって食料もなくなる。あのころの結核は死病だった。やっと治って出てきても、前のクラスの連中は上級学校の試験（大学受験）などさわいでいるが、私は取残されて鬱々と指を食わえて見ていた。

上級学校受験の直前、ひどいジフテリアになった。大部手おくれで二カ月も休んで、やっと受験した。戦争後、ひどい黄疸に二度続けてかかった。一種の栄養失調だったのだろう。私の後でその下宿に入っていた後輩は死んだ。生命びろいをしてきたわけだ。

病歴はまだいろいろある。幸なことに、社会人になってからすっかり健康になって、病気らしい病気はしていない。しかし、あのよく病気をしていた学生時代、戦争の前後のように、健康、生



命、人生ということを考えているだろうか。案外惰性で日々を送っているかもしれない。

私の親しい友人であった児玉さん（元行政部長）が亡くなって三年近くになる。駅伝の選手であった彼は毎朝八キロも走っていた。その大学駅伝の帰りの交通事故だった。体調がよくなかったようである。先日私のポケットから一袋のゲルマニウムが出てきた。だまされたと思って飲みなさいといってくれたものだ。よく体の心配をしてくれた。が、スポーツ選手だった彼が先に亡くなった。彼は私によく、健康のための相談、体力づくりスポーツを兼ねたセンターを造れといっていた。が、ある時、私の専門はスポーツでも農業（農大卒）でも行政でもなく、人生をどう生きるかということですよといった。生きることを真剣に考えていた一人である。

健康は大切である。しかし、ただ物的、生理体的な意味での体を生かしているだけではなく、一度きりの人生を健康な精神で生きるということも、より大切である。健康はその基礎づくりである。

〈技監兼都市科学研究室長事務取扱〉